

タイトル:平成 24(2012)年度 研究セミナー

日程:平成 24 年 12 月 14 日(金)～16 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

辻上 奈美江 (東京大学)

発表者は『サウディアラビアのジェンダー秩序に関する考察：権力と知を生産する言説分析を中心に』という題目のもと、2007年12月に神戸大学に博士論文を提出し、2008年3月に博士(学術)を授与された。

発表者の博士論文は、サウディアラビアでのフィールドワークそしてアラビア語の文献読解をもとに、ミシェル・フーコーの権力論を援用しながら、サウディ人のジェンダー観について、オリエンタリズム、国家、宗教、グローバル化など複数の観点から考察している。同博士論文は、加筆修正後、福村出版より2011年に『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』として出版されている。

博士論文完成までの道のりでもっとも大変だったが同時に達成感を得られたことは、ジェンダーという観点ではほとんど未踏とも呼べるサウディアラビアでのフィールドワークであった。観光ビザを発給していない国への入国は容易でないことは言うまでもないが、調査協力者の確保やアラビア語文献の収集などについては、数名のサウディ人の親切心や研究への理解なくしては、成し遂げられなかった。しかし、閉ざされた印象の強いサウディアラビアの女性社会は、いったん足を踏み入れると、無限とも思われるデータの宝庫であると感じられた。

しかし、それらのデータを博士論文として完成させる場合、データに基づいてどのように実証的に議論を展開していくのが問題となる。博士論文はテーマ選びも重要なポイントであるからだ。発表者自身の経験上、博士論文では、深く掘り下げる価値のあるテーマで、かつ広く関心を持たれる内容であることが好ましい。同時に研究上のオリジナリティや斬新さのみならず、理論的貢献も期待されている。

このようにクリアしなければならないことの多い博士論文であるが、執筆後は、その価値を実感できることもある。第一に、自明のことであるが、博士になれることである。博士号は、研究職の最低条件となりつつある。とりわけ海外での研究活動には博士号は必須と感ぜられる機会も多い。第二に、発表者の場合は、専門分野について包括的に論じる基盤を得たことであろう。博士論文後の研究では更なる発展が求められるが、博士論文はいつもその基底をなしていると感じられる。そして、第三は、単著出版に直結する可能性が高まることである。

博士論文執筆は誰にとっても容易いことではない。セミナー参加者には、健康に留意しながら博士への道のりを歩んでほしい。